

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2370 号

Analysis of Pseudoaneurysms in Solid Organs after Blunt Abdominal Injury in Pediatric age group Treated at an Emergency Center

(小児における鈍的腹部外傷後に生じた仮性動脈瘤の解析)

石原 唯史 (いしはら ただし)

博士 (医学)

論文内容の要旨

交通外傷や転落事故などによって受傷する鈍的腹部実質臓器損傷により、しばしば仮性動脈瘤が生じる。血腫の破綻や溶解により、時に遅発性出血をきたすため、成人症例では仮性動脈瘤に対しては経動脈的塞栓術 (transcatheter arterial embolization: TAE) を行うことが多い。しかし、小児においては手技的な難しさや TAE に伴う臓器合併症を引き起こすリスク等から TAE の適応に関しては定まっていない。また、慎重に経過観察をすることで、仮性動脈瘤の消失を認めたという報告も多数あり、その治療法は議論を残すところである。

本研究は、小児における鈍的腹部外傷後に生じた仮性動脈瘤について、その自然消退の頻度、入院期間と復学期間に関して解析した後方視的臨床研究である。

対象は順天堂大学浦安病院救命センターで入院加療を行った 15 歳未満の鈍的腹部外傷 17 名とした。経過中の実質臓器内仮性動脈瘤形成の有無により、2 群に分け、臨床的重症度、入院期間、復学時期、接触スポーツ復帰時期などについて診療録ベースに、後方視的に比較検討した。また、仮性動脈瘤形成群では自然消退の有無とその時期、出血性事象の有無について検討した。

実質内臓器損傷に仮性動脈瘤を合併した症例は 4 例であった。腹腔内臓器損傷の重症度や救命センターの入室期間、復学時期や接触スポーツ復帰時期に両群で有意差は認められなかった。仮性動脈瘤形成群は全例保存加療のみで経過観察され、TAE を適応されることなく、全例に自然消退が認められた。また、出血性事象は一例も認められなかった。

小児における TAE は手技の難しさなどから、合併症を起こすリスクが高く、治療法に関して一定していないのが現状である。当センターでは、バイタルサインが安定している症例では TAE を回避し、保存的加療を優先する方針としており、重大な有害事象なく全例、良好な経過を辿っている。小児においては仮性動脈瘤の自然消退が期待できるため、鈍的腹部外傷後の仮性動脈瘤の治療戦略として、バイタルサインが安定していれば、密に経過観察することは治療の第一選択としてなりうる。